

# 楊維禎の詠史古樂府

——その制作背景をめぐって——

## 序

元末明初の文人・楊維禎<sup>〔1〕</sup>には、古代から元初までの歴史に材をとった詠史古樂府の作品群がある。清の乾隆年間には、楊維禎と同郷の樓卜瀾<sup>〔2〕</sup>が収録して箋注を施し、『鐵崖詠史注』八卷を刊行した。さらに光緒年間には、やはり同郷の宋澤元<sup>〔3〕</sup>がこれを増訂し、『四家詠史樂府』に所収している。

『四家詠史樂府』には、楊維禎の『鐵崖詠史』八卷・『鐵崖小樂府』一卷のほかに、明・李東陽の『西涯樂府』二卷、清・洪亮吉の『兩晉南北史樂府』二卷および『唐宋小樂府』一卷、清・尤侗の『明史樂府』一卷が収められている。宋澤元の序に次のように見える。なお、以下、引用文中のカッコ内の注記は全て筆者による。

## 兒島弘一郎

楊廉夫先生乃擇取歷代史書一人一事、以韻語歌詠之。李峯陵（李東陽）・洪北江（洪亮吉）、後先繼起。尤良庵（尤侗）則專就明史而作、名曰樂府、實有韻之史論也。

（宋澤元「四家詠史樂府序」）

この記述から窺えるように、楊維禎の詠史古樂府は、後世の連作詠史樂府に先鞭をつけた作品として位置づけられている。『西涯樂府』〔擬古樂府<sup>〔3〕</sup>〕の作者・李東陽は、その引に樂府の演變を述べ、次のように言う。

唐李太白才調雖高、而題與義多仍其舊。張籍・王建以下、無譏焉。元楊廉夫力去陳俗、而縱其辯博、於聲與調或不暇恤。延至于今、此學之廢、蓋亦久矣。間取史冊所載、（中略）各爲篇什。（中略）雖不敢希古作者、庶幾得十一於千百。

(李東陽「擬古樂府引」)

楊維禎の樂府に一定の評価を示しつつも、「聲」と「調」がときに配慮されていない點を批判する。しかし、いづれにせよ、彼の詠史古樂府を先行作品として意識し、技癢を發しているさまが看取されよう。また、管幹貞は洪亮吉の『兩晉南北朝樂府』に序して言う。

夫今之樂府也、鐵崖始之、茶陵繼之、梅庵又繼之。稚存洪子曰、「吾之爲樂府也、祖此矣」。

(管幹貞「兩晉南北朝樂府序」)

前引した宋澤元の序よりもさらに明確に、楊維禎の作品が後世の連作詠史樂府の源泉的作品であることを示している。

本稿では、かように文人たちを刺激し續けた、楊維禎の詠史古樂府の制作背景を考察する。これらの作品群がいかなる事情の下で作られたのかを検證することによって、源泉的作品たり得た所以の一端も明らかになるであろう。なお、作品そのものについては、同じく時代網羅的に歴史を詠じた李東陽の『擬古樂府』等との比較を試みる豫定である。次稿に期したい。

楊維禎の詠史古樂府(兒島)

## 第一章 成立事情

現在、楊維禎の詠史古樂府を通覧するには、前掲『鐵崖詠史注』につくのが最も簡便である。注に示す諸本も、おおむねこれを底本として増補・校訂したものである。本稿では、『鐵崖先生詩集三種』(樓卜瀟注、清光緒崇德堂補刊)所收の『鐵崖詠史注』を底本とし、諸本との異同があつた場合は注記する。まづ、その概要を以下に示そう。

『鐵崖詠史注』は全二百四十三首の詠史古樂府を収める。配列は詠史が扱う時代順。その内容・特徴については次稿に詳述するが、歴代の人物・事件を史書の記述に基づきつつ、多様な觀點から詠じている。また、そのほぼ三分の一に當たる八十五首には楊維禎の序が附されており、制作の意圖や史論が展開される。さらに各作品には、樓卜瀟が、正史からの引用を主として、時に筆記類にも渉る詳細な注を施している。

それでは、『鐵崖詠史注』の成立事情を瞥見しておこう。編注者・樓卜瀟の序に、次のように見える。

楊鐵崖先生『古樂府』、編自門人吳復、人稱「鐵雅」。外此有『詠史詩』、編自門人顧亮、人稱「鐵史」。予求顧編不

可得、蓋書缺有間矣。前明萬曆中、先外王父淵止陳公（陳善學）爲刊『古樂府』行世、強半皆咏史詩、吳編所不載。予既出吳編付梓、因刪去已見者、不重出、另錄『咏史詩』、加之箋注、都爲一集、名亦仍舊、題曰『鐵崖咏史注』。

（樓卜瀟「鐵崖咏史序」）

これによれば、楊維禎の門人・顧亮の編になる『咏史詩』（以下『顧編』と略す）が存し、「鐵史」と稱されていたことが窺える。しかし、乾隆年間には既に稀覯書となっていたらしく、樓卜瀟はそれを手にしていない。なお、孫小力著『楊維禎年譜』<sup>(8)</sup>（以下『年譜』と略す）によれば、顧亮の收録した『楊鐵崖咏史古樂府』なる書（明の成化年間刊行）が、湖南省圖書館・湖北省圖書館に現存するようである。<sup>(9)</sup> 顧亮は、楊維禎最晩年の弟子で、至正四年（一三四四・楊維禎四十九歳）に生れた。字は寅仲、浙江上虞の人。洪武二年（一三六九）、楊維禎は彼のために「虞丘孝子詞」<sup>(10)</sup>を作っている。

『顧編』を入手し得なかった樓卜瀟は、彼の「外王父」（母の亡父）である陳善學が明の萬曆年間に刊行した『古樂府』（以下『陳編』と略す）を閲し、收録する詩の大半が「咏史詩」である點に着眼する。しかも、それらの詩は、楊維禎の古樂

府を編纂したものとしては最もはやい吳復編『古樂府』（以下『吳編』と略す）に載せない詩であった。そこで、『吳編』と重複しない詩を收録して箋注を施し、『鐵崖咏史注』として刊行したという経緯である。

ここにいる『陳編』とは、『楊鐵崖先生文集』十一卷<sup>(11)</sup>（以下『文集』と略す）所收の「古樂府」八巻を指す。『文集』は、明の萬曆四十三年、陳善學によって刊行された。前八巻が「古樂府」、後三巻が「賦」という構成である。巻頭には陳善學「楊鐵崖先生集序」・貝瓊「楊鐵崖先生傳」・宋濂「楊鐵崖先生墓誌銘」・章懋「楊鐵崖先生詠史古樂府序」、巻末には楊士奇「跋鐵崖先生復古詩集後」を載せる。また、各巻のはじめには、「華亭陳繼儒仲醇校閱・諸暨陳善學淵止訂正」とある。前八巻に收録する詩は全七百四十一首、後三巻に收録する賦は全三十五首である。これらと『鐵崖咏史注』を彼此對照し、ここに所収する二百四十三首すべてが『陳編』に見られることを確認した。

それでは、『陳編』は何に基づいて編纂されたのであろうか。陳善學の序文には経緯を記さないで、窺い知ることができない。ただし、その前八巻「古樂府」について、前掲『年譜』の編者は、吳復編『鐵崖先生古樂府』十巻（前掲『吳編』に

同じ）・章琬編注『鐵崖先生復古詩集』六卷・章懋序刊『楊鐵崖先生詠史古樂府』より收録したものだとする。『年譜』は根據を特に記さないが、その判斷は妥當だと思われる。理由は以下の通り。

『鐵崖先生古樂府』十卷と『鐵崖先生復古詩集』六卷は、『鐵崖先生古樂府』十六卷として『四部叢刊初編』に收められている。章懋序刊『楊鐵崖先生詠史古樂府』は、諸目錄に見られず、確認できない。そこで、ひとまず『鐵崖先生古樂府』十六卷と『陳編』を對照した結果、『陳編』のみに所收する古樂府が二百數十首あった。そして、それらはほぼ全て詠史古樂府であり、『鐵崖詠史注』にも收録されている。この事實と『陳編』が章懋序を卷頭に引いている點を考えあわせれば、『陳編』所收の二百數十首の詠史古樂府は、章懋が序文を書いた『楊鐵崖先生詠史古樂府』から收録したものと見なすのが穩當であろう。

章懋の序は、末尾に「關逢敦艸之歲孟夏初吉、後學金華章懋謹序」とあることから、成化十年（一四七四）に書かれたものであることがわかる。章懋、字は德懋、浙江蘭溪の人。成化二年（一四六六）の進士第一人。官は南京禮部尙書に至り、嘉靖年間の初めに八十六歳で卒している。著に『楓山語錄』一

楊維禎の詠史古樂府（兒島）

卷・『楓山集』四卷がある。なお、章懋と李東陽との間には書簡のやり取りがあり、兩者に交流があったことが窺える。

以上より、遅くとも明の成化年間には、『鐵崖詠史注』所收の作品群がまとまった形で世に出ていたことがわかる。前引した李東陽の序が書かれたのは弘治十七年（一五〇四）であるから、彼もこうした形で刊行された詠史古樂府に觸發されて『擬古樂府』を作ったのであろう。

## 第二章 制作背景

### 第一節 詠史古樂府への自負

前章に見た通り、『鐵崖詠史注』所收の詠史古樂府は時代順に配列されており、あたかも當初から連作の意圖があって作られたかのように見える。しかし、それらが「詠史古樂府」という枠組みで刊行されたのは明の成化年間であるから、その枠組みや配列をただちに楊維禎自身の意圖によるものと見なすことはできない。その點、自序などから明らかに連作の意圖をもって作られたことがわかる李東陽や洪亮吉などの場合とは、事情を異にするのである。本節では、「詠史古樂府」という枠組みと連作の意圖の有無について検討したい。次に引く章琬の識語が手がかりとなるだろう。

先生自言、予用三體詠史。用七言絕句體者三百首、古樂府體者二百首、古樂府小絕句體四十首。絕句入易到、吾門章木能之。古樂府不易到、吾門張憲能之。至小樂府、二三子不能、惟吾能之。故五峰李著作（李孝光）推爲詠史上手云。至正丙午夏五上吉、門生章琬謹拜手識。

この識語は、前掲『鐵雅先生復古詩集』卷二「古樂府二十二首」の卷頭に載せる。末尾に記される通り、至正二十六年（一三六六）五月一日、門人の章琬によって書かれたものである。弟子の傳聞という形ではあるが、楊維禎自身が自作の詠史に言及している點、注目に値しよう。前掲した章憲の序をはじめとして、その詠史古樂府を論ずる際、必ず引用される記述である。

これによれば、彼は詠史という主題に頗る關心を抱き、自覺的に様々な様式を用いて詠じたようである。ここでは、「七言絕句體」・「古樂府體」・「古樂府小絕句體」の「三體」を挙げ、それぞれの難易に言及する。本稿が對象とする「古樂府體」については、たやすく作れるものではなく、門人の張憲が能くするのみだと言う。

さて、ここに言う「古樂府體二百首」が何を指すが當面

の問題である。識語が附された卷二に載せる「古樂府二十二首」は、いづれも五言四句であるから、所謂「古樂府小絕句體」を指すと考えられ、これに當たらぬ。そこで、『鐵雅先生復古詩集』全篇および前掲『吳編』を通覽したが、該當する作品群を擬定するのは難しい。してみれば、殘る可能性は、『鐵崖咏史注』に收める詠史古樂府しかあるまい。前述した通り、そこに收録する作品數は全二百四十三首であるから、「二百首」とも概ね合致する。さらに、識語で「古樂府體」を能くすると認められた張憲の作品が、これを傍證するであろう。張憲は楊維禎晩年の弟子で、著に『玉筍集』十卷がある。その詩才は門下隨一と目され、清の朱彝尊は『靜志居詩話』に「鐵崖の諸弟子、才鋒犀利なるは、張思廉に過ぐる莫し。」と激賞する。楊維禎も彼の詩、なかんづく古樂府は、「鐵雅派」を繼ぐものであると見なし、至正十八年（一三五八）、『玉筍集』のために序を書いている。それによれば、本書は楊維禎の刪選を経て成ったもののようである。卷一・二に收める「詠史」および卷三に收める「古樂府」は、文學史的にも「鐵崖體」の典型とされる作品だが、ここで看過し得ないのは、前者の「詠史」である。これらは全て詠史古樂府であるが、注に示す通り、その中には、『鐵崖咏史注』所收の作品と樂府題

を同じくするものがあまた見られる。さらに、卷二所收の「代魏徵田舍翁詞」のように、楊維禎の古樂府をふまえたことが序から窺える作品もある。これによって、前引の識語に言う「古樂府體」が、『鐵崖詠史注』に収める作品を指すことが傍證されよう。

以上より、『鐵崖詠史注』所收の詠史古樂府は、「古樂府體」という様式による詠史作品群として、常人にも自覺されていたことが窺える。現行の『鐵崖詠史注』に見られるような時代順の配列は後世のものだとしても、「古樂府體」による時代網羅的な詠史制作への意志は看取できるだろう。それでは、なぜ楊維禎は「古樂府體」という様式で歴史を詠じたのだろうか。彼を詠史へと向かわせた理由の一つには、その事蹟が深く關係していると思われる。次節以降では、事蹟の側面から、その理由の一端を考察したい。

## 第二節 楊維禎の官歴

楊維禎の官途は艱難に満ち、意に染まぬものであった。元の泰定四年（一二三二）、三十二歳で進士となり、天台縣の長官に任命されるが、「八雕」と稱される狡黠な豪民たちを治めようとしたのが禍し、至順元年（一二三〇）免官されてしま

楊維禎の詠史古樂府（兒島）

う。ついで元統二年（一三三四）には「錢清鹽場司令」に左遷され、その不満を詩に漏らしもするが、一方では鹽賦に苦しむ民のために上訴したり、鹽工の窮狀や鹽商が暴利を貪るさまを詩に裁したりしている。まもなくして、父母が相繼いで亡くなったため、歸郷して喪に服するが、服喪期間があけても再任されず、およそ十年にわたる長い家居生活がはじまる。その間、至正の初めには、順帝が詔して遠・金・宋の三史編纂を命じている。楊維禎はこれに深い關心を示し、「正統辯」を撰して三史竝立の方針に異を唱えた。總裁官の一人であった歐陽玄はこれに感歎し、推舉しようとするが、阻む者があって頓挫する。至正十年（一三五〇）、同年の進士の推薦により「杭州四務提舉」に任ぜられるが、やはり意に染まず、不遇を託つてはたびたび推舉を求める書簡をしたためている。その後、同十六年（一三五六）、「建德路總管府推官」となって杭州を離れ、同十八年（一三五八）には「江西等處儒學提舉」に任命される。しかし、おりしも元末の兵亂に遭い、任地に赴かぬまま居を錢唐に移し、浙西の山水に游んだ。その後は出仕することなく詩酒に耽溺し、明の洪武三年（一三七〇）、七十五歳でその生涯を終えた。

以上、楊維禎の官歴を概観したが、文壇の大御所としてサ

ロンを形成した文人イメージが先行するせい、一方で官途に恵まれず不遇を託ち、挫折感を吐露した詩文を作っている事實が後景に退きがちである。なかんづく、三史編纂と「正統辯」をめぐる屈折した感情は、彼の詠史を考えるうえで看過し得ない問題を含んでいると思われる。次節では、その問題に焦點を絞って考察することにした。

### 第三節 三史編纂と「正統辯」

遼・金・宋の三史は、至正三年（一三四三）に順帝の詔が出されるや、同四年の三月に『遼史』、同年十一月に『金史』、翌五年の十一月には『宋史』が完成するという凄まじいスピードで編纂された。三史編纂の事業は、それまでも度々計畫されたが、三王朝のいづれを正統と見なすかという「正統論」が紛糾したことも一因で、長期間放置されていた。<sup>(23)</sup>ところが、都總裁の任を委ねられた中書右丞相・脱脫が、三史竝立の基本方針のもと編纂事業に着手し、それまで蓄積されていた史料を襲って、これらを完成させたのである。

楊維禎がこれに不平を鳴らし、二千餘言に亘る「正統辯」を撰したのは、至正四年（一三四四）のことであった。現在「正統辯」は、明・陶宗儀『南村輟耕錄』卷三に全文を載せ、貝

瓊「楊維禎傳」にも一部が引かれている。以下『南村輟耕錄』<sup>(25)</sup>から引用する。

表曰、至正三年五月日、伏睹皇帝詔旨、（中略）專修宋・遼・金三史。越明年、史有成書而正統未有所歸、臣維禎謹撰「三史正統辯」凡二千六百餘言、謹表以上者右。

「正統辯」は長きに亘るゆえ、その要旨をまとめれば次の通り。『春秋』の説に立脚して王朝の正閏を考えれば、宋が正統であり、遼・金は正統とは見なせない。元は遼・金を継いだのではなく宋の正統を継いだ王朝である。ゆえに、正史編纂に当たっては、『宋史』の編年の後に遼・金を載記として立てるべきだという主張である。しかし、既に三史竝立の方針のもと、編纂は着々と進行していた。「正統辯」は當局者にどう見なされたのだろうか。

楊維禎の諸傳には、三史編纂と「正統辯」との関係について言及がある。その主だったものを以下に引用しよう。

會有詔修遼・金・宋三史、君作「正統辯」千言。大司徒歐陽文公玄讀之歎曰、「百年後、公論定於此矣。」將薦之、又受阻之者。（宋濂「元故奉訓大夫江西等處儒學提舉楊君墓誌銘」）

至正初、詔徵天下儒臣、修遼・金・宋三史、先生不得預。

史成、正統訖無定論、乃著「正統辯」。其詞曰（中略）。欲獻不果、去游吳興。

（貝瓊「楊維禎傳」）

會修遼・金・宋史成、維禎著「正統辯」千餘言、總裁官歐陽元功讀且歎曰、「百年後、公論定於此矣。」將薦之而不果、轉建德路總管府推官。

（『明史』卷二八五・楊維禎傳）

これらの記述（特に貝瓊と『明史』の傳）によれば、彼が「正統辯」を著したのは三史成立の後ということになるが、前引の「正統辯」には「越明年」（至正四年）とあるゆえ、まだ三史すべてが完成したわけではない。おそらく「正統辯」に見える「史有成書」の「史」が、三史すべてを指すと考えたため起きた誤謬であろう。このことは前掲『年譜』にも既に指摘されている。<sup>28)</sup>

さて、宋濂の「墓誌銘」および『明史』によれば、「正統辯」は總裁官の一人であった歐陽玄の注意をひき、「百年後の公論はここに落ち着くであろう」と歎ぜしめた。そして、彼は楊維禎を推挙しようとしたが、何らかの事情で果たせなかったようである。「墓誌銘」に「之を阻む者有り。」とあるのが氣にかかるが、實は「正統辯」と推舉問題に關しては、楊維禎

自身がたびたび言及している。

僕所著「三史統論」（「正統辯」）、禁林已黷余言、而司選曹者顧以流言棄余。謂楊公雖名進士、有史才、其人志過矯激。署之筭庫、以勞其身、忍其性、亦以大其器。杭四務、天下之都務也。俾提舉其課而後除清華處之、未晚也。僕之不遇如此。

（楊維禎「上寶相公書」<sup>29)</sup>）

この書簡は、彼が以前仕えた上司の寶復齋に宛てられたものである。繫年は不明だが、「杭州四務」に着任した至正十年以後のものであろう。全篇切々と不遇を訴え、推挽を乞い願っている。引用部分から窺えるように、「正統辯」は「禁林」においては認められたが、「選曹を司る者」が「史才」をさておいた彼の人格に難癖をつけ、妨害をはかったようである。「杭州四務」の職務によって、その「矯激」な性格をならしてから要職につけても遅くはないと言う。

この記述は、前引「墓誌銘」の簡潔な記載を補ってくれるだろう。「正統辯」は楊維禎會心の作であったかも知れぬが、既に三史竝立を決定して編纂を進めている當局から見れば、「正統論」を蒸しかえすだけの厄介な代物だったのではなからうか。そこで、批判の矛先をそらして人格を攻撃したように



も推測される。

以上、三史編纂と「正統辯」との關わりについて見てきたが、楊維禎が三史編纂に參與しなかった理由は定かではない。しかし、既に三史竝立が決定されていたにも關わらず、敢えて異を唱えて「正統辯」を撰した點などに鑑みると、彼は編纂に關與すべく奔走したのではないか。前引した貝瓊の「楊維禎傳」に「先生預るを得ず。」とあるのが、この點では正鵠を射ていると思われる。彼自身、三史編纂が終ったあとも「正統辯」への自負は消えやらず、次のような詩句を残している。

楊子十年官不調

楊子 十年 官 調せられず

近除消息果何如

近除の消息 果たして何如

玉堂未有編年筆

玉堂 未だ有らず 編年の筆

野史寧無正統書

野史 寧んぞ無からん 正統の書

(「寄黃子肅魯子暈三首」其一)<sup>(1)</sup>

結局正式には受け入れられなかった「正統辯」であるが、彼はその後、歴史記述への意志を様々な形で作品に反映させている。官途においてついに發揮し得なかった「史才」は、それらの作品に横溢したと見える。『宋史綱目』『史義拾遺』などは史部における例であるが、詠史古樂府の時代網羅的な敘

事も、その一つの形であったとおぼしい。次章では、その制作意識を探り、さらになぜ「古樂府體」の様式で詠じられたのかという問題に言及したい。

### 第三章 制作意識

#### 第一節 「鐵史」の稱と正史への意識

第一章に引用した樓卜漣の序によれば、その詠史古樂府は「鐵史」と稱された。ところが、この呼稱は、前章で言及した『宋史綱目』についても用いられている。

余不敏、曩嘗著「三史統辯」(「正統辯」)、承辦章巖公(巖峻)表進之薦、承虞(虞集)・歐(歐陽玄)兩先生以宋三百年綱目(『宋史綱目』)見屬。稿成、又以「鐵史」目之。後罹兵變、全稿俱喪。(楊維禎「歷代史要序」)<sup>(2)</sup>

「正統辯」が江浙行省平章政事・巖峻の推薦をこうむり、虞集・歐陽玄に「宋三百年の綱目」を作るよう委嘱された旨を記す。楊維禎の撰に成る『宋史綱目』は、ここにも記される通り現存しないが、本序によれば「鐵史」と目されたらしい。三史編纂の代償としての『宋史綱目』と詠史古樂府とが、同じ「鐵史」の稱によって世に伝えられたというのは興味深い

事實であろう。また、貝瓊の「筆議軒記」には次のように見える。

瓊從鐵崖楊公在錢唐時、公讀遼・金・宋三史、慨然有志、取朱子義例作『宋史綱目』。  
(貝瓊「筆議軒記」)

勅撰の三史への對抗意識が、『宋史綱目』を書かせたようである。それでは、詠史古樂府の場合はどうであろうか。前述した通り、その時代網羅的な敘事をなさしめた所以の一つには、三史編纂における挫折が潜在していた。ここでは、詠史古樂府の中から、正史『宋史』への意識が直接的に窺える例を示しておきたい。

予讀岳飛傳、冤其父子死、而陰報之事、史不書、乃見於稗官之書。張巡之死、誓爲厲鬼以殺賊。烏知飛死不爲厲以殺檜乎。吾不敢以鬼死其英爽、而些之以厲之辭曰、(略)

(楊維禎「岳鄂王歌」<sup>(3)</sup>)

南宋の忠臣・岳飛を詠じた作品の序である。正史に記載されない「陰報の事」を用いて作ったと記されている。ここに言う「陰報の事」とは、岳飛が死んで神となり、天台第一峰に居て秦檜を苦しめたという傳説を指す<sup>(3)</sup>。楊維禎は、これを

楊維禎の詠史古樂府(兒島)

安祿山の亂で睢陽を守備した張巡の故事とからめる。祿山の軍に包圍された張巡が、「死して當に厲鬼と爲りて賊を殺すべし。」と誓った故事については贅言を要すまい。

また、次の詩は、樓卜漣が「先生の詩意、蓋し『宋史』を以て信と爲さざるなり」と注記した作品である。

#### 金櫃書

趙家光義爲皇儲

龍行虎步狀日異

狗趨鷹擊勢日殊

膝下豈無六尺孤

阿昭阿芳非呱呱

夜闌鬼靜燈模糊

大雪漏下四鼓餘

床前地 戮柱斧

史家筆 無董狐

嗚呼朱牌金字火羊飛

藝祖在天天可欺

#### 金櫃の書

趙家の光義 皇儲と爲る

龍行虎步 狀 日に異なり

狗趨鷹擊 勢 日に殊なる

膝下 豈に無からん六尺の孤

阿昭阿芳 呱呱に非ず

夜闌 鬼靜かにして 燈模糊たり

大雪 漏は下る 四鼓の餘

床前の地 柱斧を戮く

史家の筆 董狐無し

嗚呼 朱牌金字 火羊に飛ぶ

藝祖 天に在り 天 欺くべけんや

(楊維禎「金櫃書」<sup>(3)</sup>)

宋の太宗が兄の太祖を弑して即位したのではないかという

疑惑を詠じた作品<sup>37</sup>。「金櫃書」とは、太祖の生前、兄弟の間で取り交わされた誓書である。その内容は、太祖の死後、位を弟に伝え、太宗はさらに弟の廷美に伝えよというものであった。この誓書を、宰相・趙晉の立ち會いのもと「金櫃」に藏し、宮人に保管させたという。本詩から窺えるように、楊維禎は、太祖被弑説に與する立場のようであるが、注目すべきは「史家の筆 董狐無し」という第十句である。「董狐」は周知のごとく、春秋・晉の史官で、趙盾がその君・靈公を弑したことを直筆した故事で知られる。孔子が「古の良史」と評して以來、壓力に屈しない直筆の史官の代名詞として使われた。ここでは、『宋史』の編纂者たちが「董狐の筆」をふるわなかったことに不満を述べているようである。

一方、次節に引くように、楊維禎は「董狐の筆を製作す。」と自負していた。「鐵史」の稱は、そうした一連の作品に與えられた世人の評であると同時に、彼自身の矜持の現れでもあったのだろう。

## 第二節 『春秋』を繼ぐ意識<sup>39</sup>

それでは、楊維禎の詠史古樂府はどう讀まれたのであろう

か。まづは、資料を二點引用しよう。

獨先生之作、逸于思而豪于才、抑揚開闔、有美有刺、陳義論事、婉而微章、上下二千年間、理亂興亡之故、若指諸掌、而其命辭、皆卽史傳故實、倒鑷括而成、叶諸金石、若出自然。  
(前掲章懋「楊鐵崖先生詠史古樂府序」)

夫詠史、則詩史也。(中略)予竊論之。老杜始以拾遺、終以工部、目擊開元・天寶、盛而忽衰、乾元・大曆、亂而復治。故史在一代、自可當作者之聖。先生始以散員、終以閑曠、心擬「三史統辨」、定以公論、『歷代史鉞』、斷以大義。故史在千古、亦不失述者之明。是集也、其事則史、其旨則經。  
(前掲樓卜遷「鐵崖咏史序」)

前者では彼の詠史古樂府の時代網羅性とそこに含まれる「美刺」が指摘され、後者では杜甫の「詩史」と對比して「其の旨は則ち經なり。」と論じられている。また、後者において、それが「三史統辨」と同一平面上に置かれているのも看過し得ない。

こうした觀點は、故なくして出てきたわけではない。楊維禎の詩句に次のように見える。

鐵心道人前進士 鐵心道人 前進士  
棄官歸來隱喜市 官を棄てて歸來し 隠れて市に喜ぶ  
作詩每刺美未忘 詩を作るに毎に刺り 美むるも未だ  
忘れず

竊比開元杜家史 竊かに比す 開元 杜家の史

(中略)

嗚呼我持神羊之毫 嗚呼 我 神羊の毫を持し  
製作董狐之筆 董狐の筆を製作す

三史綱辯聲高聳 三史綱辯 聲 高聳たり

乞與先生相貶褒 乞ふ先生と相ひ貶褒せんことを

鳳凰不必在阿閣 鳳凰 必ずしも阿閣に在らず

麒麟不必窮西郊 麒麟 必ずしも西郊に窮せず

(楊維禎「讀弁山隱者詩鈔、殊有感發、賦長歌一首歸之」)<sup>(10)</sup>

引用部分からも窺えるように、自らの作詩態度を「杜家の史」に擬え、つねに「美刺」を心がけてきたと言う。また、同一平面上において「三史綱辯」への自負が語られているのも注目に値しよう。杜甫の「詩史」を意識した作品は、詠史古樂府の中にも見られる。安祿山の亂で房琯が大敗を喫した「陳濤斜」を詠じた作品の序に言う。

楊維禎の詠史古樂府（兎島）

杜甫亦稱琯（房琯）爲醇儒、得大臣體、至「悲陳濤斜」之詩、不揜其罪。此甫爲詩史也。予補其猶有未至者、以琯有好名之累、任人之失也。  
(楊維禎「陳濤斜」)<sup>(11)</sup>

また、彼の「詩史」についての觀點を窺うには、次の文が参考になるだろう。

世稱老杜爲詩史、以其所著備見時事。予謂老杜非直紀事史也、有春秋之法。其旨直而婉、其辭隱而見。（中略）逢（王逢） 本山澤之士、其澹泊閑靜是其本狀、而有春秋屬比之教。故予亦云春秋之詩也。  
(楊維禎「梧溪詩集序」)<sup>(12)</sup>

元末の詩人・王逢の『梧溪詩集』のために書かれた序文である。その冒頭から窺えるように、杜甫の詩が「詩史」たる所以は、そこに「春秋の法」があるからだと言う。さらに序の後半では、「春秋の法」を「春秋屬比の教え」と敷衍している。周知のごとく、これは『禮記』經解に「屬辭比事、『春秋』之教也。」<sup>(13)</sup>とあるのをふまえる。「屬辭比事」をつづめたのが、ここに言う「屬比」であろう。「屬辭比事」とは、關係のある言葉で事を順序立てて書き連ね、その敘述の中に批判をおわせる方法の謂い。序によれば、このような方法で書かれた

## 中國文學研究 第二十七期

詩が「春秋の詩」ということになる。<sup>(45)</sup> また、次の二例は自らの作詩態度に言及した詩句として注目に値する。

太史筆、不貶褒  
我作歌詩繼春秋

太史の筆 貶褒せず  
我歌詩を作りて春秋を繼がん

(奉使歌、美答理麻氏也)<sup>(46)</sup>

楊子作詞歌不誣  
他日太史春秋書

楊子 詞を作りて 歌 誣ひず  
他日 太史 春秋の書

(「孔節婦」)<sup>(47)</sup>

彼自身も『春秋』を繼ぐ意識で作詩したことがわかる。なお、この二例は、いづれも「新樂府」系の作品であるが、詠史古樂府の作品の序にも同様のスタンスが看取される。

余以春秋責賢之法責亮、以繼「梁父」篇。<sup>(48)</sup>

余以春秋法原其心、爲賦「藍田玉」哀之。<sup>(49)</sup>

此晉陽君臣不知春秋之過也。<sup>(50)</sup>

以上より、ひとつには『春秋』を繼ぐ意識から詠史古樂府を作ったことが窺えるだろう。彼の事蹟を見ても、『春秋』と

の因縁は浅からぬものがある。若かりし頃、父が鐵崖山中に築いた書樓にて『春秋』を研鑽し、泰定四年にはそれによ

て登第した。そして、他ならぬ「正統辯」の立脚點が『春秋』であったことは見てきた通りである。また、諸目錄や現存する序などを閲するに、『春秋』關連の著作も多い。<sup>(51)</sup> さらに、『年譜』には、彼が講學の場で『春秋』を教授した記事も散見される。<sup>(52)</sup> その方法としての「屬辭比事」については次稿に譲るが、詠史古樂府の主題構成もこれによるところが少なくない。詠史古樂府は、「正統辯」によって實現されなかった歴史記述の方法が流露した場でもあったようである。

### 第三節 「古樂府體」による詠史

それでは、なぜこれらの詠史作品群が「古樂府體」によって作られたのであろうか。以下、元末詩壇の狀況や「古樂府體」という様式の表現機能などに鑑みて、その理由を考察してみたい。

まづ、「古樂府」の制作が振るわないという同時代的な狀況があったようである。至正二十四年(一三六四)に書かれた門人・章琬の序に言う。

我朝詩體備矣、惟古樂府則置而不爲。天曆以來、會稽楊先生與五峰李先生(李孝光)始相唱和、爲古樂府辭。先生

嘗曰、「詩難、樂府爲尤難。吾爲古樂府、非特聲諧金石、可勸可戒、使人懲創感發者有焉。善和余者、惟李季和（李孝光）。季和死、和者寡矣。」

（章琬「輯錄鐵雅先生復古詩集序」）

元朝の詩壇において、他の詩體は全て備わっているが、「古樂府」のみ不振であるという認識が示されている。李孝光は「李楊」と並稱された古樂府の上手で、楊維禎は彼と詩を論じて意氣投合した。<sup>(55)</sup>最晩年の至正二十六年（一三六六）に書かれた「瀟湘集序」に次のように見える。

余在吳下時、與永嘉李孝光論古人意。余曰、「梅一於酸、鹽一於咸、飲食鹽梅而味常得於酸咸之外、此古詩人意也。後之得此意者、惟古樂府而已耳」。孝光以余言爲隨、遂相與唱和古樂府辭。好事者傳於海內、館閣諸老以爲李・楊樂府出而後始補元詩之缺、泰定文風爲之一變。

（楊維禎「瀟湘集序」）

「李・楊」の古樂府が出ることで元詩の缺が補われたという。前引章琬の序と考えあわせれば、楊維禎には、元詩において不振であった古樂府を復興させたという自負があったようである。詠史古樂府が作られた理由のひとつは、それが彼の最

楊維禎の詠史古樂府（兒島）

も得意とする様式であり、かつ新しい試みだという自負によるものであろう。

それでは、様式論的に見た場合どうか。松浦友久「樂府・新樂府・歌行論―表現機能の異同を中心に」<sup>(56)</sup>によってまとめれば、古樂府系作品の表現機能は以下の通りである。

- 一、樂曲への連想
- 二、視點の三人稱化・場面の客體化：作者の一人稱的な視線は捨象され、「舞臺上の場面」のような三人稱的な視點から全體が描寫される。
- 三、表現意圖の未完結化：美刺諷諫などの表現意圖が、樂府詩であることによって未完結化され、讀者に比興的解釋を可能にさせる。

詠史という主題との関連では、二と三の指摘が重要であろう。まづ、歴史上の人物・事件を提示する方法として、二の「場面の客體化」や「視點の三人稱化」が有効であることは論を俟たない。そして、三の「表現意圖の未完結化」こそは、「古樂府體」による詠史作品群が書かれた本質的理由であろう。本章第二節で見た通り、彼は『春秋』の「屬辭比事」の方法による「美刺」を心がけて詠史を作った。その意圖を假託す

る様式として、「古樂府體」は最もふさわしかったのである。

## 結 語

第二章第一節に引用した章疏の識語によれば、楊維禎は、「七言絶句體」(三百首)・「古樂府體」(二百首)・「古樂府小絶句體」(四十首)の「三體」を自覺的に用いて詠史を作っている。このうち、「七言絶句體」に関しては、周知のごとく、晩唐の胡曾に『詠史詩』の先例が既にある。神話時代から隋末に至る歴史を七言絶句で詠じた一五〇首の連作である。彼が胡曾を意識して「七言絶句體」の詠史三百首を作ったのは、疑うべくもないであろう。また、「古樂府小絶句體」は敍事の器としては、いささか字数が少ないと思われる。作例も彼自身の言うところによれば、僅々四十首である。このように考えると、第三章第三節で様式論的に考察した「古樂府體」こそが、時代網羅的に歴史を綴る様式として結果的にはふさわしかったように思える。彼が新しく試みた連作的詠史古樂府が後世の反響を呼び、ひとつのスタイルとして定着したのも故なしとしない。本稿では、彼が詠史古樂府を作るに至った背景を考察するにとどまった。次稿では、李東陽の『擬古樂府』等との比較を通じて、彼の作品の方法に踏みこんでみたい。

## 注

- (1) 楊維禎の樂府全般については、福本雅一「楊鐵崖樂府序說」『帝塚山大學紀要』第一輯 一九六四)がある。なお本稿は、同氏の發表「史詩―特に明史樂府について」(一九九九年十二月八日・早稻田大學中文學會大會)に啓發されて成ったものである。
- (2) 『鐵崖先生詩集三種』(清光緒十四年諸暨樓氏崇德堂補刊)所收
- (3) 『叢書集成續編』所收
- (4) 『李東陽集』(周寅賓點校 岳麓書社 一九八三)第一卷には「擬古樂府」二卷として收められている。
- (5) 前掲『李東陽集』第一卷・卷一
- (6) 前掲『四家詠史樂府』所收『兩晉南北朝史樂府』
- (7) 本稿では、底本とは別に、『楊維禎詩集』鄒志點校 浙江古籍出版社 一九九四)および『四家詠史樂府』所收の『鐵崖咏史』を参照した。
- (8) 『楊維禎年譜』(孫小力著 復旦大學出版社 一九九七)
- (9) 『湖南省古籍善本書目』(常書智・李龍如主編 岳麓書社 一九九八)卷四・集部・別集類・金元に「楊鐵崖詠史古樂府一卷 元楊維禎撰 明顧亮集錄 明成化刻本」と見える。
- (10) 傳は『列朝詩集小傳』甲前集に見える。
- (11) 前掲『鐵崖先生詩集三種』所收『鐵崖逸編』卷二
- (12) 東洋文庫所藏
- (13) 章懋の『楓山集』卷四(四庫全書本)は「新刊楊鐵崖先生詠史古樂府序」に作る。
- (14) 傳は『明史』卷一七九、『列朝詩集小傳』丙集、『明詩紀事』

丙籤卷五、『明儒學案』卷四五に見える。

(15) 章懋「與李西涯閣老」(前掲『楓山集』卷二)、李東陽「答章祭酒德懋書」(前掲『李東陽集』卷三)

(16) 前掲『兩晉南北朝史樂府』卷頭に洪亮吉の自序を載せる。

(17) 傳は『明史』卷二八五、『列朝詩集小傳』甲前集、明・孫作「玉筍生傳」(『滄螺集』卷四)等に見える。なお、張憲の詩は『元詩選』初集庚集に一四四首、『元詩紀事』卷八に八首が選録されている。

(18) 『粵雅堂叢書』、『叢書集成初編』所收

(19) 朱彝尊「靜志居詩話」卷二四・外臣

(20) 『年譜』所引『鐵崖漫稿』卷四「玉筍集跋」

(21) 『詩歌通典』(楊鐮等主編 解放軍文藝出版社 一九九九)「玉筍集」項(丁朋執筆)に「卷1-2爲詠史詩、卷3爲古樂府、這都是楊維禎『鐵崖體』的典型體裁。」とある。

(22) 「悲吳王」・「月支王頭杯歌」(楊詩「月氏王頭飲器歌」)・「重舍人」・「井底蛙」・「跋扈」(楊詩「跋扈將軍」)・「千里草謠」(楊詩「千里草」)・「大礪謠」・「梁父吟」・「合肥戰」・「獵許行」・「費尚書」・「夕陽亭」・「玩鞭亭」・「鳩酒來」・「代魏徵田舍翁詞」(楊詩「田舍翁」)・「匡復府」・「桑條章」・「机上肉」・「陳壽斜」・「白衣山人」・「李五父」・「奴材」(楊詩「奴材篇」)・「藍面鬼」・「柿林院」・「甘露行」・「封刀行」・「王鐵槍」・「李天下」・「金床兔」・「陳橋行」・「金櫃書」・「潭淵行」・「悲靖康」・「一綱謠」・「岳鄂王歌」・「冷山使」(楊詩「冷山使者」)・「咸淳師相」

(23) 三史編纂と「正統論」に關しては、愛宕松男「遼金宋三史の

楊維禎の詠史古樂府(兒島)

編纂と北朝王族の立場」(『文化』第一五卷第四號 一九五一 東北大學文學會)に歴史學的立場からの論稿がある。

(24) 至正二十一年、楊維禎は陶宗儀に請われ、その父親の墓誌銘を作っている。『東維子集』卷二四「白雲漫士陶君墓碣銘」。

(25) 元明史料筆記叢刊 中華書局 一九九七

(26) 至正四年條

(27) 『年譜』によれば、歐陽玄が「正統辯」を讀んだのは至正五年六月である。

(28) 『東維子集』卷二七(四庫全書本)

(29) 『年譜』は至正十三年に繫年する。

(30) 楊維禎は三史編纂に參與しようとしたが挫折した、という指摘は公書儀著『元代文人心態』(文化藝術出版社 一九九三)にも見られる。ただし、楊維禎の歴史作品との關係づけはなされていない。

(31) 『年譜』至正八年條所引『鐵崖楊先生詩集』卷上

(32) 『年譜』至正五年條所引『鐵崖先生集』卷二

(33) 『清江文集』卷四(四庫全書本)

(34) 『鐵崖咏史注』卷八

(35) 樓卜漣の注に「原註、飛死爲神、居天台第一峯、禽槍受諸苦楚。」と見える。

(36) 『鐵崖咏史注』卷八

(37) 樓卜漣の注は陳樞『通鑑』、『通鑑續編』・商略『通鑑』(『通鑑綱目續編』・李燾『長編』)『續資治通鑑長編』を引く。以下、樓注を参考に注記する。○光義：後の太宗。○龍行虎步：帝王と



なるべき相。太祖が「光義、龍行虎歩、他日必爲太平天子。」と言ったことをふまえる（商輅『通鑑』）。○阿昭：太祖の長子・德昭。○阿芳：太祖の次子・德芳。○夜闌：柱斧・開寶九年（九七六・太祖沒年）の雪夜、病中の太祖が弟の光義（晉王）を召し後事を託した。側近たちは同席を許されなかったが、燭影の下で、太祖が柱斧を振るったように見えたという（李燾『長編』）。○朱牌金字：「金櫃書」を指す。○火羊：丁未の歳を指す。古來、この歳には、國家に多くの災禍が起こるとされている。宋・柴望『丙丁龜鑑』参照。○藝祖：太祖の通稱。ここでは、宋の太祖を指す。

(38) 『左傳』宣公二年

(39) 楊維禎の詠史古樂府が『春秋』を旨として作られたという指摘は、劉美華『楊維禎詩學研究』（文史哲出版社一九八三）第三章「楊維禎詩内容剖析」に見られ、本節を書くに当たり参照した。但し、「正統辯」や杜甫の「詩史」との明確な關係づけはなされていない。

(40) 『年譜』至正五年條所引『鐵崖先生詩集』卷丙集

(41) 『鐵崖咏史注』卷五

(42) 『東維子集』卷七

(43) 「詩史」については、龔鵬程『詩史本色與妙語』（臺北學生書局 一九八八）第二章「論詩史」に言及がある。楊維禎の發言は引用されていないが、本節との關係では、以下の指摘が注目に値する。「黃徹『碧溪詩話』推崇杜詩史筆森嚴、寓有褒貶、『誠春秋之法也』。これは南宋の黃徹『碧溪詩話』卷一、諸史列傳條に

見える記述を指摘したものであるが、楊維禎の「詩史」觀と酷似していることが窺えよう。

(44) 『禮記』卷二六。鄭玄注に「屬、猶合也。春秋多記諸侯朝聘會同、有相接之辭、罪辨之事。」とある。また孔穎達疏に「屬、合也。比、近也。春秋聚合會同之辭、是屬辭、比次褒貶之事、是比事也。」とある。

(45) また、同様の趣旨を述べたものとして、楊維禎「金信詩集序」『東維子集』卷七がある。

(46) 『鐵崖先生詩集三種』所收『鐵崖樂府注』卷六

(47) 同右

(48) 『鐵崖咏史注』卷三

(49) 『鐵崖咏史注』卷四

(50) 『鐵崖咏史注』卷五

(51) 『春秋合題著說』・『春秋大義』・『春秋胡傳補正』等

(52) 『年譜』至正九年條・至正十九年條など

(53) 『四部叢刊初編』所收『鐵崖先生復古詩集』卷一

(54) 『靜志居詩話』卷二・劉基に「樂府辭、自唐以前、詩人多擬之、至宋而埽除殆盡。元季楊廉夫・李季和輩、交相唱答、然多構新題爲古體。」とある。

(55) 『東維子集』卷一一

(56) 『中國詩歌原論——比較詩學の主題に即して』（大修館書店 一九八六）